




## History of the Lead Isotope Studies on the Archaeological Objects in Japan

山崎一雄

---

はじめに

- ① Brill の研究とその発展
- ② Brill と山崎の共同研究
- ③ 日本における研究の経過



考古遺物に対する鉛同位体比法を開発したのは米国コーニングガラス博物館の R. H. Brill であった。この 1965 年の発表を聞いた山崎はこれを日本出土の遺物に応用したいと思ったが、室蘭工業大学の室住正世の協力を得て実現したのは 1974 年であった。その前に Brill との協力で日本出土のガラスの鉛同位体比の測定を行い、弥生時代かめ棺出土のバリウムを含む鉛ガラスは中国戦国時代のバリウム鉛ガラスと化学成分が近く、同位体比が一致し、輸入したものを加工したと考えられることを見出した。また正倉院のガラス玉、薬師寺の本尊台座から出たガラス玉などの同位体比は日本産の鉛鉱石に近く日本製であることを明らかにした。室住による測定では、三角縁神獸鏡の鉛同位体比は日本産の鉛鉱石とは異なることを見出した。1976 年から始まった文部省科学研究費の特定研究により室蘭工業大学と東京国立文化財研究所（馬淵ら）による研究は非常に促進され、ガラス、青銅器などについて著しい成果が得られた。